

連日「普天間基地問題」の文字が紙上で躍り、新聞のページを開く気になれない。「もう読みたくない、たくさんだ!」という無意識の反応が身体の奥から出てきている。沖縄の米軍基地問題と日米安保、憲法9条と平和憲法、曖昧にして来た戦後日本の政治のツケが、政権が代わった今、露わになった。

果たしてこの状況下で、アートはどのように機能しているのか、しないのか。東京アートシーンに足を運



おきなわ美術コラム

視線

上原誠勇

んだ。格差社会、経済の停滞、閉塞感といった現実には、芸術表現の場でも無関係ではない。社会を映しとる鏡としてアートが有効に機能している良質の展示会は、見応えがあった。

若手の登竜門となった「VOCA展(上野の森美術館)」では、沖縄から参加した阪田清子の作品「移動すること」を見た。沖縄の磁場と距離、クールで科学性の感性をおびたビジュアル装置は異彩を放っていた。「照屋勇賢展(同)」では、琉球紅型に染め抜かれた昭和天皇裕仁の「御真影」が展示された。さらに天井に吊し上げ、広げられた紅型の布には「天皇メッセージ」の原文(英語)が部

挑発する沖縄アート

分的に染め記されている。かなり刺激的な展示会だと受け止めたが、担当の学芸員によるとマスメディアは関心を示さず、「沖縄の挑発を無視した格好だ」。

「六本木クロッシング2010展 芸術は可能か? (森美術館)」は照屋の「さかさまの日の丸」が会場入り口正面に展示された。沖縄大米軍ヘリ墜落事故をモチーフにした作品ピザBOX「来たるべき世界」にも展示され、同展のアートと社会の関係を示す代表的作品として位置づけられていた。しかし、ここでも照屋作品のカタログ解説文は、多様性を伴う内容は評価するも「挑発する沖縄アート」の本質に言及せ

ず、十分に語られていない。解釈の「ズレ」と「ズルさ」、ヤマトびとの都合の良い目線は、自覚症状のないがんにように皮膚の下に潜んでいるようだ。「森村泰昌展(東京都写真美術館)」ではその片鱗が見られた。昭和天皇とDMCAカーの立写真作品「思わぬ来客/1945年日本」は、アメリカナイズした戦後の日本社会を語るも、その背景にある物語「天皇メッセージと沖縄」は微少にも触れてない。米軍基地の多くを沖縄に配置し、日米安保と憲法9条が「欺瞞の平和」に染め抜かれている事実を、勇賢アートは実直に発信し、挑発するのだ

が。(画廊沖縄代表)